

## 【研究ノート】

# 政治と政治学に関する一つの覚え書き ——ジェリー・ストーカーその他に関する読書ノート——

石 見 豊

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 ストーカーの主張と筆者の意見
- 3 ヘイの議論と主張
- 4 政治学をめぐる模索と残された課題
- 5 おわりに

## 1 はじめに

政治への不満や失望が広がっているように見える。また、政府への信頼も低下してきているように思う<sup>(1)</sup>。これはわが国に限らず、世界各国に共通した傾向のようである<sup>(2)</sup>。そうした空気の影響もあり、政治学への関心は益々低下している。ただし、「政治学への関心の低下」という表現は少し注意して用いる必要がある。と言うのは、社会科学を研究する専門家の間では政治学への関心は必ずしも低下しているわけではないからである。例えば、公共選択論や合理的選択論に見られるように政治学と経済学との垣根は低くなってきている<sup>(3)</sup>。経済学者の中にも政治学の研究対象や研究アプローチに関心を持つ人もいる<sup>(4)</sup>。これは経済学者のみならず社会学者や経営学者についても言える。また、政治学者も他の社会科学（経済学、社会学、経営学など）の研究対象や研究アプローチに関心を持っている<sup>(5)</sup>。つまり、社会科学の学問間での相互

交流は進展している。その一方で、政治学の中での専門分化や増殖が急速に進んでいる（これは政治学に限ったことではないが）。このような点から、専門家レベルでは「政治学への関心は低下」しているわけではない。

ただし、ここで言う「政治学への関心の低下」とは、そうした専門家の間での研究対象やアプローチに関する話ではなく、例えば、学生などが大学で専門分野を選択する際の話である。端的に言うならば、学生が受験学部・学科を選ぶ際に政治学を選ばない（選ぶ割合が少ない）ということであり、その背景には、社会の求める実学志向が影響していると思われる。学生が大学卒業後に勤める企業や政府機関がどれだけ大学（特に社会科学系学部）に実践的な教育内容を期待しているかは分からないが、少なくとも学生は実践的な学問分野を選び、何らかの資格等を取得し、技能を修得するほうが大学卒業後の進路選択に有利であるという考えを持っているようである<sup>6)</sup>。

大学が学生の求めるこうしたニーズに応えるべきか否かといった問題や、大学とは実学教育の場なのか、それとももっと根源的な原理・原則を教育する場なのかといった問題についてここで論じようとしている訳ではない。もちろんそうした大きな問いとも関係するが、筆者が素朴に感じる疑問は「政治学とは何か」「政治について学ぶ意味は何か」といった問題である。これも十分に大きな問いであり、この問題をめぐってこれまでに多くの先行研究が行われてきた（たいていの政治学の教科書はこの問題から論述を始めている）。そうした政治学の存在意義・価値に関する先学者たちの蓄積を振り返るとというのが、筆者の上記の問いへの答えを見つける第一歩であることは理解している。しかしながら、正直それは筆者の意欲をかきたてる作業ではない。もちろん数が膨大で文献渉猟に時間と労力を要するというのも理由の一つであるが、自らの存在意義を主張する著作を読んでも筆者の疑問は氷解しないのではないかとの危惧を持つからである。

そんな折に、ジェリー・ストーカー著（山口二郎訳）『政治をあきらめない理由—民主主義で世の中を変えるいくつかの方法—』（岩波書店、2013年）という本と出会い、同書は筆者の疑問にかなりの示唆を提示してくれるのではな

いかとの感想を持った。そこで、同書の解題を手がかりに、政治や政治学の意味について試論的に考えてみようと思う。

## 2 ストーカーの主張と筆者の意見

### (1) ストーカーの議論と主張

ジェリー・ストーカー (Gerry Stoker) は、イギリスの政治学者で現在、サウサンプトン大学の教授をしている。これまでにグラスゴーにあるストラスクライド大学やマンチェスター大学でも教鞭を執ってきた。分権、自治、ガバナンス、民主主義など現代政治の広範な問題に関心を持ち研究を行っている。同書の原題は、*Why Politics Matters: Making Democracy Work* であり、同書は2006年イギリス政治学会賞の受賞作である。

同書は、そのはしがきにおいて次のような記述で始まっている。同書執筆の目的が的確に表現されているので、少し長いが引用してみる。

「本書は、私が今までに会った多くの人が政治を嫌悪していると感じたことから、生を受けた。(中略)なぜ人々は政治を苦痛と感じているのかを説明し、政治はそれほどひどいものではなく、自由や福祉を守るためにきわめて重要だということを説得しようと、本書は試みる。現代世界を支配している民主的ガバナンスの形式をより良く働かせることは、それを怠って起こるより悪い結果を防ぐ唯一の方法である」<sup>(7)</sup>

ストーカーがまず立てた論点は「なぜ政治は重要か」という問題である。この点に関して、ジョン・ダンやバーナード・クリックの主張を参考にしながら次のように述べている。

「政治とは、社会につきものの対立を、非合法的な強圧や暴力に訴えることなく、何とかして処理する知恵にかかわるものである。特に民主主義にお

いては、政治は妥協し、合意に到達することを可能にする活動である」<sup>(8)</sup>

ただし、この「民主主義」が問題なのである。ストーカーも指摘するように「世界のおよそ三分の二の国では、（中略）民主主義の基本的制度が存在している」<sup>(9)</sup>。しかし、民主主義の実際の働きに目を向けると、政党や議会、選挙などの民主主義のしくみが民意を反映させるものとして十分に機能しているとは言えない。こういう現実に対して政治や政治家を批判的に疑いの目で見るとシニシズムが広がりメディアがそれを助長している。また、その一方で、強い個性とリーダーシップを売り物にするポピュリズムが人気を博して、これも世界各国共通に見られる現象である。ストーカーは、シニシズムは民主政治を腐敗させ、ポピュリズムは政治の複雑さを見落とすことになると批判している。このような点がストーカーの問題意識であり、副題（原文でも邦訳でも）が示すように同書は民主主義に関する本なのである。民主政治に対する不満について説明すると共に、民主政治にとっての望ましい参加のあり方や民主政治をより良いものにするための議論を展開している。

ストーカーの著作を総花（羅列）的に紹介しても意味がないので、特徴的な（興味深い）箇所についていくつか挙げてみる。まず、序章において同書の第一の主張として、人々に政治に対する「より有能なアマチュアになるよう努めるべきである」と述べている。その前提として、「政治はアマチュアの領域である」と断っているわけであるが、「有能なアマチュア」が意味するところは、職業政治家やロビイスト、ジャーナリストに教えてもらうのではなく、「市民自身が、何が大事かについて発言」することであると述べている。また、何が大事かについては個々人がそれぞれの「人生を生きているので（中略）見解が一致することはない」とも述べている。そして第二の主張は、「発言権を持つということは、決めることではなく、影響する力を持ちたいということである」と述べている<sup>(10)</sup>。この2点が同書でストーカーが最も主張したかった点である。

第I部では、民主主義の勝利と失望について書かれているが、特に第三章で

は「なぜ政治に失望するのか」という問いが立てられている。これに対して「政治家が腐敗して無能だからか」「批判的で孤独化した市民が政治に幻滅しているのか」「政策課題が制御不能になったからなのか」など、興味深い仮説が立てられたが、市民の政治的幻滅の原因は、「政治家の腐敗や不正の増加に由来するものではない」ようである<sup>(11)</sup>。問いに対する回答は、続く第四章（この章は「埋め込まれた失望？」なる副題を持つ）の結論において、「政治とは、その成り立ちからして、失望するように出来ている」という形で示されている。これは回答とは言わないかもしれないが、失望する原因として、政治の持つ集権的性格、コミュニケーションの複雑さ、相互調整と負担の発生（必要性）などの点を挙げている。

解決策を求める第Ⅲ部では、第十章において「新地方主義（New Localism）」が政治制度の再生策として提案されている。ストーカーは「民主主義には、ローカルという次元がなければならない。国民国家はもはや民主主義の唯一の制度ではない」と述べている<sup>(12)</sup>。つまり、ストーカーは、トクヴィルのように「地方自治を民主主義の学校」と捉えて、ローカルの重要性を主張している訳ではない。分権やローカルなしには「複雑化する現代的ガバナンス」に対応することができないからである。この場合の「ローカル（地方）」とは、①地方公務員、②地方の民主主義制度、③近隣社会（コミュニティ）の総体を意味している。特に③の要素を加えることにより、市民参加が促進され、コミュニティの機能面での管理（犯罪予防、公園管理など）が容易になる。そして、「信頼、共感、そして社会資本の涵養を可能にする」という<sup>(13)</sup>。

そして、もう一つは市民社会と市民参加に関する部分である。ストーカーは、第十一章の記述を次のようなジャン・グリュージェルの引用で始めている。「市民社会という言葉が何を意味するかは、……必ずしも明確ではない。……それは、結社、個人、コミュニティの主体の領域である」<sup>(14)</sup>。それに続いてストーカー自身の言葉で次のように述べている。

「ジャン・グリュージェルの市民的領域に関するやや暫定的な定義は、それ

政治と政治学に関する一つの覚え書（石見）

でもこの章の議論の出発点を提供する貴重なものである。なぜなら、民主主義を機能させるためには、政治制度をいじるだけではだめだということ、そして政治の市民的土台を強化することも含まれるということ、思い出させてくれるからである」<sup>(15)</sup>

その上で、ストーカーは、諮問、討議、共同統治（市民参加型予算編成など）、直接民主制（住民投票）、e デモクラシーなどの新しい多様な市民参加形態を紹介している。市民参加の方法は多岐にわたるほうが良く、「隙間風吹く市民ホールにおける退屈な市民集会だけが存在するといういわれはない」<sup>(16)</sup>。ただし、これらの新しい参加技法の有効性を判断する基準の必要性についても述べている。それは2つあり、「一つはそれによって市民は関心を持つ政策決定に対して、違いを作り出せたかという点である。もう一つは市民に対して熱心な活動家になるという気の重くなる要求を突き付けることなしに、そのような参加を可能にしたかという点である」<sup>(17)</sup>。一見、イギリス人らしいウィットに富んだジョークを交えながら、有効な参加技法に関する実は丁寧な議論を展開していると言える。

ストーカーの記述の各論部分で筆者が興味を持ったのは以上の点であるが、もう一度、ストーカーのメインの主張について確認したい。むすびにおいて次のように述べている。

「第四章で論じたように、政治とはそもそも失望するように設計されているのである。しかし、政治は重要な仕事を私たちのためにしてくれる。我々の声を大勢のところに届け、重大な問題について紛争を封じ込め、協力を実現するよう、妥協や取引を行う。

この本の目的の一つは、人々に政治についてより現実的で肯定的な理解をってもらうことである」<sup>(18)</sup>

## (2) 筆者の感想と若干の意見

今日、公式の政治制度（特に議会制民主主義）への失望が広がり、変わらない政治や変わらない政治への反感からヒーロー（英雄、扇動的改革者）を待望する雰囲気があり、その空気を的確に掴んだポピュリズムや劇場型政治（争点を明確にし、敵味方〔支持勢力と抵抗勢力〕を分け、政治を一種の公開ゲームの見世物に演出する手法）が一定の支持を得ている。ストーカーは、このポピュリズムに対して、政治を過度に単純化するものとして批判している。実際の政治は、理想と現実、そして多くの利害（関係者）が絡む複雑なものである。過度の単純化は市民から考えるという行為を奪うことになるので、ストーカーのポピュリズム批判についてはまったく同感である。

ストーカーの議論の特徴は、極端に理想に走ったり、現在のしくみ（公式の政治制度）を全面的に否定したりするのではなく、現実の状況やしくみを踏まえながら、そこに新たなしくみを組み込むことによって、改善や補完を目指すという点ではないかと思う。それが端的に示されているのが、むすびにある次の言葉である。同書の内容の要約にもなっているので、少々長いがそのまま引用する。

「職業的政治家と普通の市民の間に広がった分断は次第に解いていかなければならない。両者の間に広いコミュニケーションのチャンネルを作り、代議政治の改善と市民参加の機会の拡大によって、この亀裂を架橋する必要がある。伝統的な国民国家における政策決定に注目することと並行して、地方化とグローバル化という二つの方向での政策決定の移行に対処する政治の仕組みを構築する必要がある。最後に、メディアと生き生きとした市民教育の実践で、疎外ではなく、理解を増進させることによって、民主政治を支えていかなければならない。政治はある種高貴な作業であるとは思わない。それは、人間の条件に対処する実践的で実際の活動である。我々は紛争を解決し、相互の利益のために行動を調整する道を見つける必要があるからこそ、政治は存在する」<sup>(19)</sup>

この見事なまでに現実的で漸進主義的な（気の長い）主張に特に反論はない。それは現実的にはそれしか可能性のある選択肢がないからである。また、ストーカーは「政治とは何か」という点について十分な答えを提供してくれている。しかし、筆者の心は晴れない。ストーカーの議論を読んで、政治が何か、政治が重要であることは頭では理解できても、まだ心の中に納得できない何かが残っている。それは、ストーカーの議論では、市民にある種の忍耐（我慢や努力）を求めているからかもしれない。また、「政治とはそもそも失望するように設計されている」との答えでは納得できないものを感じるからかもしれない（この点も市民にある種の忍耐を求めるものである）。こうした疑問を感じている時偶然であるが、コリン・ヘイ著（吉田徹訳）『政治はなぜ嫌われるのかー民主主義の取り戻し方ー』（岩波書店、2012年）なる本に出会った。ヘイは同書の中で、政治不信の原因について「ダイヤモンド・サイド（有権者側）」ではなく「サプライ・サイド（政治家側）」にあるという議論を展開している。ヘイの議論は、筆者のストーカーへの不満を晴らしてくれ、「政治とは何か」「政治を学ぶ意味」という筆者の問いに対してより納得のいく答えを提示してくれることが予想されるので、次に簡単にヘイの議論についてみることにする。

### 3 ヘイの議論と主張

まず、コリン・ヘイの略歴について記す。同書の「訳者あとがき」の記述によれば、ケンブリッジ大学クレアコレッジでM.Philを取得した後、ランカスター大学社会学部でネオ・マルクス主義者のボブ・ジュソップの指導を受けてPh.Dを取得し、バーミンガム大学教授を経て、2007年からはアンドリュー・ギャンプルの後任としてシェフィールド大学の教授を務めるという華麗な経歴の持ち主である<sup>(20)</sup>。また、同書はイギリス政治学会の出版最優秀賞（William James Mackenzie賞）を2008年に受賞している。

前節で触れたヘイの「ダイヤモンド・サイド」と「サプライ・サイド」に関する議論を見る前に、ヘイの主張の要点や筆者が興味深いと感じた箇所について

挙げてみる。まず、ヘイの主張の要点は「日本語版への序文」で明確に示されている。第1の主張として、政治と政治家の言動を区別すべきと述べている。ヘイは「政治の必要性を擁護しているのであって、それを提供する政治家を弁護しているわけではない」と言う。その政治の擁護についてのテキストとして、バーナード・クリックの名著『政治の弁証（原題 *In Defence of Politics*）』の有用性に触れている。第2の主張として、ストーカーと共通するガニシズムや劇場型政治を批判し、普通の市民の討議による政治の価値を強く認めている。「アマチュア的で、討議的で、殊勝な政治には、目に見えない、それ以上の価値がある」と述べている。第3の主張は、政治学者の果たす役割に関して「政治の何に価値を置くのか、そしてこの価値をより公的に反映させるため、どのような政治制度を作るべきなのかを考えるべきだろう」と述べている<sup>(21)</sup>。

興味深いと感じた箇所については2つだけ指摘することにする。一つは、現代政治の幻滅の理由が明確に述べられている部分である。ヘイは、その理由として、①公共選択論の台頭とその新自由主義との接近、②グローバル化による多様な課題の浮上の2点を挙げた。

「前者が政治による介入に深い猜疑心を表明し、政治過程の非効率さを強調する一方、後者は（中略）政治的介入は時代錯誤だと主張し、（中略）政治プロセスが果たす役割に根本的な反省を迫った」<sup>(22)</sup>

もう一つはヘイが豊富な選挙などに関するデータに基づいて政治不信の原因を突き詰めようとしていることであるが、特に次の3つの論点を同時に扱おうとしていることである。

- ①市民は、公式的な政治プロセスに参加する機会（投票、入党、政治集会など）をどの程度活用しているか。
- ②市民は、非公式的あるいは議会外での政治行動にどの程度参加しており、それが「政治的」な行動であるとどの程度感じているか。

③政治、民主政治、政府に対する態度がどのように変化したか、もっと言って政治家や公僕への信頼や信用が最近になって顕著に低下しているか<sup>(23)</sup>。

さて、そろそろ本題の「ディマンド・サイド」と「サプライ・サイド」の議論に移ることにする。ヘイは、これまでの政治学者たちが、政治不信や政治離れについて分析する際に、供給（政治家）側ではなく消費（有権者）側に注目する傾向があることを問題視した。具体的に言えば、投票率の低下は、政治家側に問題があるのではなく、有権者側に問題があるとして論じられることが多く、ヘイはそれを批判した。ヘイが、こうしたディマンド・サイドの見方を批判したのは、①そうした解釈が「提示したデータと符合しない」からであり、②その解釈が政治家側には問題がないという免罪符を与えることになり、「問題の本質を無視しかねない」からであり、③「同義反復の罠に陥る可能性がある」からである（例えば、投票率の低さの原因を有権者の無関心に求め、その無関心の理由を投票率の低さに求めるような）<sup>(24)</sup>。

その上で、現代の政治不信や政治離れに関するディマンド・サイドに立った3つの有力な説明をヘイは批判した。第1の批判の対象はパットナムの提唱したソーシャル・キャピタル（社会関係資本）に向けられた。パットナムの主張を単純化して言うと、投票率の低下は社会関係資本の低下に原因があるということになるが、ヘイは、日本、イギリス、スウェーデンでは投票率は低下しているが、社会関係資本は安定もしくは増加傾向にあると反論している。つまり、パットナムには「アメリカの経験を過大視する危険」があり、アメリカについても過去の政治的参加の高さと今日の退行状況を比べて論じるのは「過去へのノスタルジア」に過ぎないと批判している<sup>(25)</sup>。第2の批判の対象はピッパ・ノリスなどの「批判的市民」論に向けられた。「批判的市民」とは、「棄権やオルタナティブな政治的抗議を通じて、その不信を表明し（中略）生活の質や個人の自由を優先する『脱物質主義的価値観』に彩られている」若い世代を意味している。ヘイは投票率の低下を「批判的市民」の台頭によって説明しようとするこの説明法に対して、「投票率そのものの低下の説明」にはなっていない

いと批判し、「有権者の認識や応答といったダイヤモンド・サイドだけを見ていただけでは」、政治の捉え方と現実政治の間の断絶の深層は見えないと述べている<sup>(26)</sup>。第3の批判の対象はマーク・フランクリンなどの「投票年齢引き下げの結果」仮説に向けられた。いくつかの先進国で投票率の向上を目的として投票年齢の引き下げ(20歳から18歳へ)が行われてきたが、フランクリンは「投票年齢の引き下げは(中略)初めて投票に行く人々の割合を減少させることになるという」。それは、投票に行くかどうかは有権者が属している「社会ネットワークの強度に依存している」からである。若い層はこのネットワークが弱く、初めての選挙で投票しなかった人々はさらにそれが習慣化し、その後も選挙に参加しなくなり、つまり投票年齢の引き下げは当初の目的にとっては逆効果(投票率の低下)をもたらすことをフランクリンは実証した。ヘイはこのフランクリンの分析手法を高く評価しながらも、投票率の低下を投票年齢の引き下げという要因だけで説明するには無理があると言う。それは、フランクリンの主張が、①投票には社会ネットワークの強弱が影響し、②若年層ほど社会ネットワークが弱く、③最初の投票行動は習慣化するというような多くの仮説に基づいているからである<sup>(27)</sup>。

このようにダイヤモンド・サイドの説明は社会学的な手法を用いたものであったが、「有権者が政治的アピールをどう受容したかの観察が説明の中心になって」いて、政党のアピール内容がどう変化したのか、選挙戦の性質がどう変化したのか、政府側の能力がどう変化したのかなどの「サプライ・サイドの要素は勘案されていない」と批判している<sup>(28)</sup>。それに対して、ヘイは政治不信と政治離れに係るサプライ・サイドの要因に注目する説明として次の3つを挙げた。①先進国の選挙に見られる市場化の動き(政策内容の差が小さくなってきたので、政党は政策遂行能力のちがいをイメージとして伝えようとする)、②政治エリート(政治家など)自身が公共選択論を受け入れ、政治や公的部門の領域を小さくしようとした(政策形成・実施の独立機関などへの委任の動き)、③グローバル化が公共政策の形成能力と自律性に与える影響の3つである<sup>(29)</sup>。

ヘイが主張したいことは、①まず、ダイヤモンド・サイドのみに注目して、サプライ・サイドへの視線が忘れられてはならないこと、②次にダイヤモンド・サイドとサプライ・サイドの語を分離的に捉えるべきではなく、ダイヤモンド・サイドとサプライ・サイドの相互作用に注目すべきこと。つまり、投票率の高低は、有権者の気分だけではなく、政党が何を提供するかによっても決まる。ただし、まずは有権者が参加するかどうか（そういう気分になるかどうか）が重要なのである。③そこで、サプライ・サイドからの影響が及ぶためには、ダイヤモンド・サイドに「それが重要であると認識されていなければならない」。④それをさらに突き詰めれば「サプライ・サイドの実際ではなく、それがどうダイヤモンド・サイドから認識されているかの方が大事」ということなどを主張した<sup>(30)</sup>。

これらのヘイの丁寧な議論に関しては何も付け足す言葉を持たない。ダイヤモンド・サイドとサプライ・サイドに関する学問的な論争に関してではなく、ヘイの文体（もしくは議論のスタイル）についてであるが、次のような訳者の感想に筆者も共感する点だけを付け加えておく。

「この本の文章が丁寧な言い回しや限定詞を付けて、ニュアンスに富んだものになっていることも、魅力の一つになっている。（中略）どちらかといえば、紋切り型で明快な結論を下す文章が読者にも世間にも好まれる時代にあって、このように穏やかな、しかし全体を通じて一つのメッセージが込められているような、柔軟かつ強靱な思考法が必要とされていることは間違いないだろう。公正でありつつ、しかし時たま皮肉を利かせながら、高い見識から読者を導いていくその姿勢は、政治学ならではのスタイルといってもいいかもしれない」<sup>(31)</sup>

また蛇足かもしれないが、同書をバットナムの『孤独なボウリング』のパロディと読む訳者の解釈は卓見と言える<sup>(32)</sup>。ただ最後に、ダイヤモンド・サイドかサプライ・サイドか言った難しい論争ではなく、ヘイの言う政治とは何かと

いう点だけ確認しておきたい。ヘイは、普通の市民の討議を通じた政治に価値を置いている。そして、政治は政治家と有権者の間の相互作用として理解すべきであると考えている。また、政治学(者)には、研究のし易いダイヤモンド・サイドだけでなく、サプライ・サイドにも目を向けることを勧め、究極的には政治の持つ価値を反映させる政治制度を設計すべきだとしている。

#### 4 政治学をめぐる模索と残された課題

##### (1) 政治学とは何か、政治学に求められること

こうしたストーカーやヘイの議論を見ると、彼らの考える「政治」のイメージについては少し理解できたような気がする。政治とは社会の対立を暴力に寄らず解決する知恵や活動である。そして今日、政治学に求められることは、政治家と市民(有権者)の間の信頼などの面での断絶を修復するために代議政治の改善と市民参加を拡大する政治制度の再設計案を提案することではないかと思う。サプライ・サイドとダイヤモンド・サイドの双方でのリ・デザインが政治学に求められている。

そこで本節では、いま述べたような政治学への問題関心についてもう少し掘り下げて考えてみることにする。その際に参考にするテキストは、荻部直著『ヒューマニティーズ 政治学』(岩波書店、2012年)である。荻部は日本政治思想史を専門にする研究者で、これまでに数冊の専門書を著してきたが、その中でも特に『丸山眞男ーリベラリストの肖像』(岩波新書、2006年)はサントリー学芸賞を受賞している。これまでに多くの丸山眞男論が発表されてきたが<sup>(33)</sup>、荻部は従来の丸山眞男論(批判や擁護論など)が丸山を「体系建設型」の思想家として考えすぎたのではないかと指摘し、できるだけきあいのイメージを取り払い、丸山ののこした言葉と対話しながら、丸山が生涯を通じて、「現代」の人間と政治について、そして、「日本」という空間について考えた軌跡をたどっている<sup>(34)</sup>。筆者は非常に興味深く読んだ記憶が残っている。その同じ荻部の手による政治学の入門書を政治学という学問の性格について考

える手がかりとして用いることにする。

荏部の『政治学』は、一般的な政治学の教科書とまったく異なる切り口（語り口）によって構成されている。通常の政治学教科書の場合、権力や国家、市民などの政治学の基本概念もしくは、議会、選挙、政党、官僚制、利益集団などの政治のしくみや担い手（アクター）によって章立てがされている。分量などによって若干のちがいはあるものの大体同じである。現在の政治学の教科書の中で最も体系化されたものの一つと言える久米郁男ほか『政治学』（補訂判、有斐閣、2011年）にしても、荏部自身が編者の一人に入っている荏部直・宇野重規・中本義彦編『政治学をつかむ』（有斐閣、2011年）にしてもその点は共通している。それに対して、荏部の『政治学』はまったく異なる。岩波のヒューマニティーズ・シリーズの一冊（大学の教科書より市民向けの教養書）であることも理由の一つであるかもしれないし、総頁数が100頁余ということもその要因の一つになっているのかもしれない。そして、荏部が日本政治思想史の研究者であることも関係しているかもしれない。

とにかく他書では見られないユニークな切り口で構成される同書の第1章には「政治学は『役に立つ』のか」という副題が付されている（メインタイトルは「日常性と政治」）。そこでは、ジョージ・オーウェルの代表作である『動物農場—おとぎばなし』は、ロシア革命に始まるソヴィエト連邦による共産主義体制の歴史をモデルとしたものであることを紹介している。そして、角川文庫版に寄せた開高健の解説を引用している。

「この作品は左であれ、右であれ問うことなく、ある現実にたいする痛烈な証言であり、予言である。 Kommunismusであれ、ナチズムであれ、民族主義であれ、さては宗教革命であれ、いっさいの革命、または理想、または信仰のたどる命運の、その本質についての、悲惨で透明な凝視である」<sup>(35)</sup>

この引用に続いて荏部は次のような自身の見解を述べている（引用が続くことをお許し頂きたい）。

「どんなに自由に見える体制であっても、何らかの理想を政治という回路によって実現しようと試みたたん、それは薄汚れていく。しかし、そもそもそれが起こるのは、ともによい形で生きてゆきたいという願望を、人々もっているからだろう。理想への願いが最初にあるからこそ悲劇が生まれ、現実によって裏切られることを通じて、理想は遠い彼方でますます光を増すこともある」<sup>(36)</sup>

このような荊部の見解を参考にすると、政治学とは現実の政治の状態を理想の状態に近づけていく努力ではないかと思った。ストーカーやヘイラの解題から見てきた政治家と市民間の信頼の回復や代議政治の改善、市民参加の拡大などの点とも接点を持っている。

同書の第4章ではもう一点、非常に興味深いことが指摘されている。それは政治の持つ「演技性」と偽善に関する指摘である。文芸・社会評論家の福田恆存が丸山眞男らの進歩的知識人の言動を偽善的と批判したのに対して、丸山が偽善の持つ効用を訴え反論した点について紹介している。そして、そう考えた丸山の理由について次のように述べている。

「偽善はたしかに、純粋な道徳家から見ればほめられない態度であるし、逆に人は結局色と金だと考える実際家(?)からも、どうしてそんなに無理をするのかと嘲笑される。だが、その偽善すらも捨て去ってしまえば、たちまち人は、欲望に支配された『動物』へと転落してしまうと丸山は考えた」<sup>(37)</sup>

また、「『偽善』こそはまさしく『演技の世界』としての政治を、実は支えるものである」<sup>(38)</sup>との洞察も鋭い。そして、政治的演技に長けたイギリスとその貧相な日独を対比させた丸山の言葉<sup>(39)</sup>を引用しているあたりも大変興味を引き寄せられる。政治家や官僚たち、経済人、海外からの声、場合によっては市民運動家も含めて、こうした政治に関わる人々の演技や嘘や偽善などの技(アート)を見抜く洞察力と楽しむ余裕(精神力)を養うのが政治学の役割で

## 政治と政治学に関する一つの覚え書（石見）

あると荏部の議論を読みながら考えた。

荏部の他に、政治学に関する手がかりを求めて、いくつかの教科書を再読した。例えば、後藤一郎『政治学原論—講義ノートより—』（敬文堂、1979年）や佐々木毅『政治学講義』（東京大学出版会、1999年）などを読むと、まず政治学の科学化の試み（行動主義の影響）とその限界について述べられている。ただし、政治学とはどういう種類で性格を持つ学問なのかという点については明確には述べられていない。上記の科学か否かという議論を踏まえれば、芸術（アート）と科学（サイエンス）という2つの性格を持つ学問だと言えなくはない。最後に参考にしたいのはバーナード・クリックの説明である。クリックは『現代政治学入門』（講談社学術文庫、2003年）の冒頭で、政治学の性格について次のように述べている。

「政治学とは、社会全体に影響をあたえるような利害と価値をめぐる生じる紛争についての研究であり、また、どうすればこの紛争を調停することができるかについての研究である。それを研究したからといって、『なにもかもが入り組んで哀しい世の仕組み』を正すことは期待できないにしても、この世での生活を改善するのに非常に有効な事柄を学ぶことにはなるだろう。諸君が政治学の学士号を取得すれば、（中略）どの社会科学の学士号よりずっと満足しうるものである」<sup>(40)</sup>

この文は3つの部分から構成されている。①前段の政治学が利害・価値調整や紛争調停のための知恵を提供する学であるとの指摘はほとんどの政治学教科書が共通して指摘していることである。②中段の現状改善のための思索という点が小論を通じて明らかにしてきたことである。③後段の政治学の学位に対する社会的評価や教授陣自身による信念には教えられる点がある（とだけ言うておく）。

## (2) 残された課題、民主主義について学び直す

小論を執筆するために参考にしようと集めた文献が卓上に大きな山を作っている。ただし、そのほとんどを原稿に活かすことができなかった。小論の執筆を通じて痛感した点は、政治の意味や政治学の性格について明らかにするためには民主主義についてもう一度学ばなければならないということである。そこで、今後筆者がこの点について取り組む際に手がかりになりそうな本を最後に挙げておく。

第1のグループは、民主主義そのものに関する本である。バーナード・クリック（添谷育志・金田耕一訳）『デモクラシー』（岩波書店、2004年）や宇野重規『〈私〉時代のデモクラシー』（岩波新書、2010年）などがそれである。第2のグループは、シティズンシップに関する本である。政治思想史と関連づけながらシティズンシップの空間について概説した寺島俊穂『現代政治とシティズンシップ』（晃洋書房、2013年）がまず手ごろな入門書である。また、バーナード・クリックほか（鈴木崇弘・由井一成訳）『社会を変える教育—英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから—』（キーステージ21、2012年）もイギリスでの実践を踏まえた貴重な提案である。少し乱暴かもしれないが、シティズンシップとは「公民教育」もしくは市民政治学の現代版と理解しているが、その理解の妥当性について確認したい。第3のグループは、熟議に関する議論である。これについてはまず、田村哲樹『熟議の理由—民主主義の政治理論—』（勁草書房、2008年）を読まなければならない。そして、最後の第4のグループは、ストーカーやヘイも批判したポピュリズムに関する議論である。ヨーロッパにおけるポピュリズムの歴史や動向を縦横に整理した吉田徹『ポピュリズムを考える—民主主義への再入門—』（NHK ブックス、2011年）が参考になりそうである。これらの書は、田村のものを除いて専門書というより入門書に属すが、まずはそれらを咀嚼するところ取り組みたいと思う。

## 5 おわりに

小論は政治や政治学について書いた筆者にとっては初めての文章である。筆者は行政学を専攻し、特に地方自治分野の研究を行っているので、狭義の政治学（理論、思想、歴史など）は畑違いである。バジョットやラスキのようなイギリスの政治評論の伝統を受け継ぐストーカーの本に出会わなかったら正直言って小論を書く勇気は湧かなかっただろう。それにしても全体の半分近くを引用や参照で占めるものを研究の成果物として公表しても良いのかとの疑問を持っている。小論はあくまでも研究の一里塚としての「研究ノート」であり、筆者の問題意識を探求する際に参考にした文献の「読書ノート」であるということ、小論のようなスタイルと内容をお許し頂ければと思う次第である。

小論を書く原動力（そもそもの疑問）は、「なぜ政治や政治学は、近年、社会（企業や一般市民、学生など）からあまり評価（重視）されないのか」という点にあった。小論の執筆を通して、政治学に強い誇りを持っているクリックを別にして（この表現には多分にジョークが含まれていて、クリックも政治学の現状や未来について楽観視している訳ではないと思うが）、ストーカーやヘイなども同種の悩みや問題意識を持っていることを知り、少し救われた気持ちになった。

政治学の価格破壊（価値低下）の元凶は誰かと言えば、ヘイの見方によれば、公共選択論（新自由主義的思考方）とグローバル化ということになる。小論の冒頭で、今日、政治学と経済学の垣根は低くなっていると述べたが、しかしそのこと（経済学の方法論などの政治学への進出）自体が政治学の価値低下の要因になっているのかもしれない。筆者は別に政治学と経済学の間を壁を築き、政治学が古い殻に閉じこもるべきだと主張しているわけではない（現実的にそんなことは不可能である。時計の針を後戻りさせることはできない）。経済学や他の社会科学から学ぶべき点は学びながらも、その一方で、政治学が古くから受け継いできた性質は今後も大切にすべきであるということが言いたいの

ある。その性質とは、すぐに実現できるかどうか分からないが希望を失わずに理想の国家や社会を求めて改善の方法（制度や思想）を提案し続けるということである。それはすぐに答えの出ない、気が遠くなるほどの時間のかかる思索の長征である。すぐに成果が問われるせつかな現代社会においてこそ、この政治学固有の性質を再評価すべきではないかと思う。

政治学はアートかサイエンスかという点について上記で触れた。その両方の性格を持っている訳であるが、政治研究 (Political Studies) と政治科学 (Political Science) という言葉の使い分けは、両者の重心の置き方を反映した用語法である。小論は、前者の政治研究の伝統を継承するイギリス政治学の作品を手がかりに政治研究の持つ研究志向の重要性を主張するものである。蛇足であるが、それを「政治研究 (Political Studies)」なる名を持つ雑誌で発表できることを大変幸せに思う。

## 注

- (1) 政治行政への信頼の低下について、諸外国の状況や地方自治体の状況、または司法部（最高裁）に対する信頼まで総合的に扱った研究として、日本政治学会編『年報政治学 2010 - I 政治行政への信頼と不信』木鐸社、2010年が挙げられる。
- (2) アメリカの政府への信頼や不信を扱ったものに、ジョゼフ・ナイほか（嶋本恵美訳）『なぜ政府は信頼されないのか』英治出版、2010年や、堤未果『政府は必ず嘘をつくーアメリカの「失われた10年」が私たちに警告することー』角川SSC新書、2012年がある。
- (3) 最近、政治過程論（特に計量政治学）を用いた政治経済学の研究が田中愛治や河野勝らを中心に精力的に展開されている。
- (4) わが国の経済学者（公共選択論）による官僚制分析の代表的なものとして、黒川和美『官僚行動の公共選択分析』勁草書房、2013年が挙げられる。また、近年、経済学者や経営学者によるNPMに基づいた自治体経営分析が盛んである。一例として、山内弘隆・上山信一編『パブリック・セクターの経済・経営学』NTT出版、2003年などがある。
- (5) 政治学（行政学）者によるゲーム理論を用いた官僚制研究に、曾我謙悟『ゲームとしての官僚制』東京大学出版会、2005年がある。そもそも選挙・投票行動

政治と政治学に関する一つの覚え書（石見）

分析が統計的手法を用いた政治学研究の代表分野であるが、これについては膨大な研究事例があるのでここでは触れないことにする。

- (6) 同種の問題意識を共有しているものとして、山口二郎『いまを生きるための政治学』岩波書店、2013年、pp.16-19、参照
- (7) ジェリー・ストーカー（山口二郎訳）『政治をあきらめない理由—民主主義で世の中を変えるいくつかの方法—』岩波書店、2013年、p. viii
- (8) 同上、pp.10-11
- (9) 同上、p.12。これに関連して、またストーカーは、民主的ガバナンスの基準を満たす政治システムとして、①普通選挙制、②一定の任期で、自由で競争的な選挙によって選ばれる政府、③言論、結社の自由などの政治的権利の存在の3つを挙げている。同上、p.28、参照
- (10) 同上、pp.23-24
- (11) 同上、p.96
- (12) 同上、p.261
- (13) 同上、pp.261-262
- (14) 同上、p.271
- (15) 同上、p.271
- (16) 同上、p.287
- (17) 同上、p.289
- (18) 同上、p.304
- (19) 同上、p.308
- (20) コリン・ヘイ（吉田徹訳）『政治はなぜ嫌われるのか—民主主義の取り戻し方—』岩波書店、2012年、p.219、参照
- (21) 同上、pp. vi - viii
- (22) 同上、p.7
- (23) 同上、pp.16-17
- (24) 同上、p.51
- (25) 同上、p.56
- (26) 同上、p.60 および p.63
- (27) 同上、pp.66-67、参照
- (28) 同上、p.71
- (29) 同上、pp.72-75、参照
- (30) 同上、p.78

- (31) 同上, p.222
- (32) 同上, p.223
- (33) 筆者が読んだものだけでも, 水谷三公『丸山真男—ある時代の肖像—』ちくま新書, 2004年, 竹内洋『丸山真男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム—』中公新書, 2005年, 渡部純『現代日本政治研究と丸山真男—制度化する政治学の未来のために—』勁草書房, 2010年, 『丸山真男—没後10年, 民主主義の〈神話〉を超えて—』河出書房新社, 2006年がある。
- (34) 荏部直『丸山真男—リベラリストの肖像—』岩波新書, 2006年, pp.12-15, 参照
- (35) 荏部直『ヒューマニティーズ 政治学』岩波書店, 2012年, p.12
- (36) 同上, p.12
- (37) 同上, p.88
- (38) 同上, p.89
- (39) 荏部は英独の政治的演技の優劣に対する丸山の次のような見方に注目している。「芝居ずきが多いイギリス人は, 同時にステイツマンシップをもって鳴る国民でもあり, しかもイギリス人の政治的感覚は, ドイツ人の眼にはこれまた伝統的に, 鼻持ちならぬ『偽善』と映じて来た当のものなのだ。イギリス人から見れば, ヴェグナーを崇拜したヒットラーのあの大仰な『演技』などは, 見るにたえない田舎芝居でしかなかったろう」。非常に興味深い観察である。同上, p.89
- (40) バーナード・クリック (添谷育志・金田耕一訳)『現代政治学入門』講談社学術文庫, 2003年, p.13